七重八重花は咲けども山吹の実の一つだになきぞ悲しき

七重八重花は咲けども山吹の実の一つだになきぞあやしき　後拾遺集　中務兼明親王

太田道灌が鷹狩りの帰途雨中に茅屋を訪ね蓑を借用しようとしたが、応対した娘は山吹の花を差しだすばかり。後に「山吹の実の」が「蓑」をさし、お貸しすべき蓑もないことの寓意だったことを知り、己が無学を恥じる。